令和３年１１月２９日発行
第５２６号

原町小だより「はらまち」

川口市立原町小学校
全校児童数４２４名

― すべての子供の学びを保障する 笑顔あふれる原町小学校 ―

ＨＰアドレス　https://haramachi-kawaguchi.edumap.jp/

「学びは楽しい」

加田　明

「校長先生いますか？」「これつくったので見てください」

最近、２年生が自分で作成した本（絵本）を持ってキラキラな瞳と笑顔で校長室を訪れることが増えました。何枚もの紙に書かれた作品はホチキス止めにしてあり、中には「作；〇〇、絵：〇〇」といったように２人で協力して作ったものもあります。感動的な内容のものや１０ページ以上の大作もあり、図書館司書の増田先生はじめ職員室の教職員といつも感心しながら読ませてもらっています。２年生ならではの豊かな感性で、読む人を引き込み楽しい気持ちにさせる創意工夫はたいしたものです。作るのは大変だったと思いますが、作品からは子供たちの作っているときの笑顔や夢中になって考えている姿が伝わってきます。もう１５作品ほどになるでしょうか、しばらく図書室に置いて他の学年の児童にも読んでもらっています。

子供たちは自分で考えた本を作ることを「学習」とは考えていないと思います。好きなことにチャレンジし創意工夫を凝らし、粘り強く考えたりすることはその子にとっての「学び」です。また、「遊び」は楽しいけれど「学習」は辛くていやなものと感じている子供も多いようです。多くの子供にとって「勉強は無理やりやらされるもの」というとらえがあるからだと思います。

さて、文部科学省では幼児の「遊び」を重要な「学習」としています。

> 自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的な活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。したがって、幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。
> （文部科学省：幼稚園教育要領解説より）

しかし、幼児教育の「遊び」を通じた学びの教育的意義や効果は、まだ十分に認識されておらず、子供が主体的な遊びの中で試行錯誤し考えることが「主体的・対話的で深い学び」につながっていくことの理解を深めていく必要があります。

教育哲学者　苫野一徳さんは新聞のコラムで次のように語っています。

> 「遊び浸るから学び浸るへ」。幼児教育の基本中の基本である。子どもたちは、遊びを通してこそ成長する。学びに必要なものは、遊びの中にすべてあるとさえ言っていい。
> 遊びを通して、子どもたちは何かに熱中する楽しさを知る。「こうやったらもっと楽しくなるんじゃないか」と、創意工夫を凝らしたり、粘り強く挑戦したりすることを学ぶ。友達との遊びを通して、人間関係の築き方も学んでいく。（中略）
> ところが小学校に入るやいなや、遊びと学びはきっぱりと区別されてしまいがちだ。「今は勉強する時間です。遊びは終わり」といった言葉が、そこかしこから聞こえてきたりする。その結果、子どもたちは、遊びは楽しいもので、勉強は嫌なもの、といった意識を抱くようになる。本当は、学びこそ最高の遊びにほかならないのに。知らなかったことを知ること、できなかったことができるようになること、新しい世界が広がること、新たな人間関係ができること。そんな学びが、楽しくないはずがない。
> 遊び浸るように学び浸る。そんな学びのあり方を、小学校以上の教育においてどう実現するか。これからの学校教育の、大きな課題である。

今夏、文部科学省中央教育審議会に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が立ち上がりました。そこでは幼児教育と小学校を繋げるための方策が検討されています。

「遊び」の中での気づきから「探求」へという学びのプロセスが幼児期に保障され、小学校１年生以降との連携・接続により小学校の教育活動や指導のあり方の改善につなげることが期待されています。

「遊び浸るから学び浸る」子供たち「学びに夢中になる」子供たちの育成のためには、「知識を教える」（知識の注入）教育ではなく、「学び方を学ばせる」こと「学ぶことが楽しい」ことを子供たちに教えてあげることが必要だと思います。